

第4章 電脳福祉社会の行方



橋爪 大三郎

東京工業大学工学部助教授。
東京大学社会学研究科博士
課程修了。社会学専攻。社
会学の理論的研究を精力的
に続けるかたわら、一般向
けの著作活動や、中国関連
の仕事も手がけ、幅広い領
域で活躍している。著書：
「橋爪大三郎コレクション
I～III」、「言語ゲームと社
会理論」、「仏教の言説戦略」、
以上勁草書房、「はじめて
の構造主義」（講談社現代
新書）他。

かされている、ということです。

ですから、将来のロボット住宅は、ある意味で、現在の病院のICUの中に先取りされていると
考えられないこともない。人間と機械が共生していく道筋の一つは、社会全体の集中治療室化とい
うことですね。そのあたりについてはどうお考えでしょうか？

○橋爪 ずいぶん間口の広いことをおっしゃっていただいたんだけど、おおむね私もそう思っていて、
賛成です。集中治療室の話が出たけど、あれはやっぱり病人のためのものだから、もうちょっとイ
メージを明るくするために、別の例をあげましょう。

スペースシャトルというのがあります。あれが、僕のイメージしていたホームオートメーション
にかなり近いんですね。スペースシャトルというのは、本来人間が生存することが不可能な宇宙空
間で、ある程度快適に暮らせるための基本的なユニットです。だから、宇宙環境の中で暮らす場合
の、生存に必要な条件を供給するための装置という意味では、スペースシャトルはまさに「ウチ」
なんです。「ウチ」（家）なんだけども、従来の家というものとはちょっと違っています。つまり、
生存の条件が厳密に計算され、コントロールされているのです。もしこれがなかったら、生命過程
が崩壊してしまう。このように、家と人が一つのシステムとして一体化しているということが、
非常に重要な点ですね。こういうスペースシャトル型の家というのは、人間の環境に対する要求水
準が高まっていったら、環境そのものが劣悪になってくれば、みんなが考えるはずですよ。

電脳福祉



ロボット住宅の出現

●森岡 まず最初に、橋爪さんが昔から言われている、人間と機械が共生する社会について考えてみ
たいと思います。

私も、将来、人間と機械とが共生する社会が、必ず実現すると思っています。橋爪さんは、具体
的なイメージとして、ロボット住宅、すなわちセンサー付きの住宅が人間をケアし、サポートして
いくというイメージを出されています。

確かに、ロボットがいまの調子でどんどん発達していくと、老人や身体障害者が、ロボット住宅
によって支えられながら生きていくという状況が出てくると思います。そこでまず、ロボット住宅
によって支えられる社会というのは、どういう社会なんだろうかという点について、いろいろと考
えていきたいのです。

ロボット住宅という言葉聞いて、私がまず連想するのは、病院の集中治療室（ICU）なんで
すね。病院の中に、集中治療室という特別の部屋があって、そこには、非常に重病の人たちが入っ
ているわけです。意識があるかどうかかわからないような患者さんたちです。そういう患者さんたちは、
ベッドサイドに置かれた脈拍や脳波のモニター装置、血圧を維持するさまざまな薬品、あるいは看
護婦さんたちのケアによって支えられています。つまり、ICUにいる患者さんたちは、機械や人
間のサポートによって初めて生存可能となる。つまり、ICUという「部屋」そのものによって生

●森岡 なるほど。アメリカでは、バイオスフェア計画というのがあります。それは、今おっしゃったスペースシャトルのような閉鎖空間の中に、エコシステムを人工的に作り上げようというものですね。

○橋爪 バイオスフェア計画とスペースシャトルは似ているけど、ちょっと違う面もあります。スペースシャトルみたいな宇宙船の場合、必ずしも閉鎖系である必要はないんですね。やがて地球に帰還することが約束されているし、資源はすべて持ち込みなんです。だからスペースシャトルは、宇宙空間にただよっている物体ですが、その中の環境が、完全に循環的に制御されているというわけではないんです。

人間と機械が共に生きていくというあり方を示す言葉として、メカニズムということを私は言ってきました。メカニズムとは、機械がなければ人間が生きていけないという両者の相互依存のことをさしますが、一口に相互依存といってもいくつかのレベルがあるわけです。最初の段階は、さっきおっしゃったICUみたいなものです。そしてもう一つ重要なことは、このような状況は、最も生きにくい人の方から順番に起こってくるということです。つまり、具体的にいうと、病人、老人、障害者です。こういう人たちが、まさきにこのメカニズムの段階に入るわけです。そういうことは、われわれ一般の健常者に関係ないと思う人がいるかもしれないけど、そうではなくて、彼らの置かれている状況は、時間を引き伸ばせば、将来の問題をいま集中的に引き受けているのだとも言えるんです。

それから、機械と人間の依存関係は、まず臨牀的な延命策というかたちで現れてくると思います。つまり、障害によって欠損した能力を機械によって補うというやり方です。ICUなんかはその典型ですね。だけど、臨牀的な延命策がどんどん進展していくと、今度は、もっと別の形に変わっていく可能性もあります。すなわち、予防医学的な延命策ということです。

●森岡 そうですね。その通りだと思います。

○橋爪 予防医学というのは、病気の発生を未然に予見し、寿命そのものを引き伸ばすことでしょ。だから、たとえばTOTOなんかは、トイレにセンサーを置いて糖尿病や肝臓病を日々チェックすることを考えているわけです。もしそれと料理のユニットを連動させれば、本人のその日の体調に応じて、調理して支給するというのが可能になります。そして食べ残しを見て、好みなんかを学習し、その人の個性にふさわしいようなライフスタイルを、ホームオートメーションの側で用意する。

●森岡 人間と機械の共生が最初に訪れるのは、老人・病人・障害者の方からだというのは、まさにその通りだと思います。そしてそれは、現に起こりつつあることでしょ。病人・老人・障害者といった人々は、われわれの従来の価値観からすると、社会の周辺部に隔離され、保護されねばならない人たちです。ところが、現代のテクノロジーは、彼らを機械文明のトップランナーに押し上げ

てしまった。つまり、彼らは、いつのまにか、人間と機械が融合していく、その先頭に位置してしまっている。だから、未来社会の人間が必要とする、機械との共生の知恵やノウハウやテクニックは、現在、病人・老人・障害者たちが、自らの血を流しながら作り上げているものを基礎として築かれるのだと思います。

言語反応型コンピュータが鍵

○橋爪 人間と機械の関係について、もう少し考えてみたいと思います。

とりあえずセンサーが機械の側にあって、人間の反応をキャッチして、それにあわせて機械も動くというレベルにすぐになるだろうと思います。しかしこれは、機械が単品として人間に反応しているだけですから、もうちょっとレベルを高くしなければなりません。

人間にとって一番本質的な環境は、他者です。自分と他人との関係を調整するために、われわれはずっと言語という道具を使用してきました。だから、この言語に機械が反応してくれたら、人間にとって一番負担が少なくてすむわけです。今は、プログラム型のコンピュータで、いちいちプログラム入力しなければなりませんが、あれは大変遅れたというか、欠陥商品なんです。自然の言語に反応してくれるようになるのが一番よろしい。とは言っても、これは、機械が人間の脳と同等のものを備えていない以上、完全になることはありません。そこでとりあえず暫定的に、たとえ

ば三〇〇語のレベルで、きわめてかぎられた言葉に反応してくれるようなタイプのコンピュータが、実用化されていくでしょう。

本当に自然な形で人間と対話ができるようなコンピュータが開発されるまでは、かなり長い年月を要すると思います。何百年、あるいは千年くらいの範囲かな。かなり時間がたって、人間がホッとするような機械が現れるだろうって思ってます。

●森岡 とても長い時間がかかるとお考えなのですね。

○橋爪 この言語反応型のコンピュータというのは、おそらく個性を持つだろうと思います。それは、自動車が一台一台個性を持つのおんなじような意味です。人格とは異なります。そして一応、人間と同等の存在として扱われるようになるでしょう。それはどういう存在かというと、「自動車+ペット」です。ペットというのは、相手に個性を認めるけど、それは飼い主が認める個性であって、第三者にとってはただの動物にすぎません。人間というのは、誰が認めようと認めまいと、一個の独立した人格を持っている、社会的に独立した存在でしょ。

そういう言語反応型の機械が、人間の周囲に現れてきて、トータルなライフケアを行います。そういうオートマティックな家庭というのが、スペースシャトルが地上に降りてきたという意味での「ウチ」ということです。それが、ある程度この家庭でも標準装備されるようになります。服を着たり、最低限の生活必需品を持つてるとおんなじように、「ウチ」に住んでいるということ

が前提にされて、社会的なメンバーの単位になっていくんじゃないでしょうか。

● 森岡 そういうふうには超一機械化された「ウチ」と

その中に住む人間は、いずれ物理的に融合しちゃって、サイボーグ化していくことが十分考えられますね。で、一方、一つの「ウチ」は、他の多くの「ウチ」とさまざまな面で結合され、互いに情報を発信しあって、全体を多元的にコントロールしあうという形をとるんじゃないでしょうか。たとえば、エネルギーや食料の供給とか、橋爪さんがおっしゃったような健康管理などを、それぞれの「ウチ」が発信する情報をもとに、円滑にコントロールするネットワークができあがるでしょう。だとすれば、個々の人間は自分の「ウチ」と物理的に融合し、その「ウ



チ」同士がお互いにネットワークで密接に結合しているような社会が出現することになります。これは、社会というものを、何か新しい次元へと導くことになるのではないのでしょうか。たとえば、バラバラの個人が相互の契約によって一つの社会を形作るというイメージではなく、もっと別の形の社会が誕生するのではないかという印象を、私は持っているんです。

○ 橋爪 私は、そうはならないと思います。一人ひとりの人間の自発性や自己決定というものがあるかぎり、社会のイメージはそれほど変わらないと思いますよ。生存条件だけが、機械に依存しているというだけにすぎないですから。

さっきおっしゃったのは、POSシステムって言うてます。今も、コンビニが街角ごとにあってそこでは、何時頃にどんな客が何を買いに来るかということが、ほぼ予想されているわけです。そのためコンビニの棚には、必要なものだけが並べられていて、余計なものは一切置いていない。これが、将来、各「ウチ」すべてのシステムになるんじゃないかということです。個々の「ウチ」には若干のイレギュラーがあるかもしれないけど、五軒、十軒とまとまればばば間違いないそのふるまいが予測できるはずです。その場合、システムが集中管理され、物流の装置となっているので、いちいち購買を決定しなくても必要なときには手に入るようになります。しかしこれは、個々の意志決定の集積という考え方の範囲内じゃないかな。

● 森岡 もちろん、そういうふうにも考えることもできます。コンビニの例は、すごくいい説明だと思

います。ただ、「ウチ」の集中管理システムというのは、単に、コンビニに品物を配置するシステムとは、どこか基本的には違わないのでしょうか？

「ウチ」に住んでいる人の尿の状態をリアルタイムで全部調べることで、ある地域の人間の健康状態が全体としてわかるようになっていくわけです。たとえば、ある町に住んでいる人たちの、コレステロール値がわかるようになったとしたら、自動的にその地域の人々に対する保健行政ができるようになり、精密なケアが可能になりますよな。

でも、その保健行政それ自体が、ある「ウチ」に届ける食料からあらかじめ塩分を減らしておくというような、「ウチ」システムに乗った形で行なわれてゆくわけですね。確かに、この社会でも、各個人の自由意志や自己決定が尊重されるだろうとは思いますが、しかしもう一方では、非常に精密でミクロな形での個人のコントロールがなされてゆくだろうと思うんです。なんていうのかな、いやらしいくらいに厳密にコントロールされてくるんじゃないかな。

○ 橋爪 しかしそれは、毎日、世論調査されているのとおなじで、コントロールっていうのはあたらなと思います。それとも、リアルタイムに健康状態がチェックされたとして、将来予測はどういうふうにして行なうんですか？ もし、五年後、二〇年後、三〇年後の正確な将来予測が可能になったとすれば、さまざまな健康政策の決定も可能でしょうが……。

● 森岡 うーん。「ウチ」システムを使うと、世論調査のルートと同じ道を、ちょうど逆にたどるこ

とで、「ウチ」への物質やエネルギーや情報のコントロールが簡単にできてしまう、ということになります。私の考え違いかもしれませんが、これはやっぱり「コントロール」と言えるんじゃないでしょうか。未来予測については、その通りですね。難問となって残るはずですよ。

テクノロジーの美学

○ 橋爪 いろんな医療技術が進んでゆけば、人間の生命的なプロセスは、ほとんど機械的なメカニズムによって置き換えられてしまうことになります。まず、ホームオートメーションの家、そして、その人の身体もほぼ完全に機械になっていきます。機械というのはトラブルを起こしますが、修理や部品交換によって、新しい機械に置き換えることができます。そして、次々に更新されていきます。つまり、その人の生命であったものが、ほとんどメカニズムの集積になってしまふのです。こういった未来像を思い描いてみた場合、それは人間の自由を充実させるためのテクノロジーなのか、それとも機械的なメカニズムがただ自分を更新しているだけなのか、だんだんわからなくなてきます。

● 森岡 そうですね。ですから、将来、人間が自由と自己決定とを拡大していくことそれ自体が、実は、大きなシステムの効率的な流れの一部分となって取り込まれてしまうんじゃないかと思うのです。

○橋爪 そして、テクノロジーが新陳代謝する非常に大きなメカニズムの中であって、人間の脳を焦点とするような、いろんな機械の系列があるということですね。そこには、確かに人間が存在するんだけど、非常に大きな機械のシステムの中に巧妙に織り込まれていきます。

●森岡 もっと極端に言くと、そういうネットワーク型社会における人間の自由の保障は、巨大なシステムの微細な管理とコントロールに裏づけられることによって初めて可能となる。そういう逆説的な状況が生まれる可能性があるんじゃないかと。

○橋爪 ただし、この機械システムの中で最も能力が高いのは、やっぱり人間の脳なんです。人間の脳が完全にシミュレートできないうちは、人間の脳を機械で代替することはできません。だから、人間という観念はずっと生き続けます。人間の生きるレベルは、そのときどきのテクノロジーの水準によって決定され、次々にバージョンアップされていきます。

たとえば、「ロータス123」のバージョン1の次には、値段が半分で性能が倍のロータス2とというのが出てくるように。こういうプロセスは、ほぼ自動的に進んでいくわけ。そして、テクノロジーの進歩のメカニズムは、やっぱりその時代の集合的無意識をかたちづくるんであって、その中で生かされている人間個々人の自由にはなりません。人間がいかなるものかというのは、同時代に生きている大勢の人々が置かれている状況によって決まってくるわけで、それは誰しも受け入れなければならないのです。

こうして続いてきた過去の文化的伝統というのが、社会全体の無意識みたいなものに対して訴えかけていきます。いま、無意識と呼んだけれど、それはテクノロジーの美学と言ってもいいし、あるいは科学的な発見の蓄積と言ってもかまわないと思います。

●森岡 私は、「無意識」でいいと思います。今おっしゃったように、自由というのは、そもそも人間主体を支えている社会の無意識によって規制されています。これは昔からずっとそうだったし、将来も変わらないと思います。ですから、将来のネットワーク型社会で、獲得されるべき人間の自由というのは、電子ネットワーク型の社会の無意識によって束縛され、そしてその中で開花するものだというになります。その場合の、電子ネットワーク型社会が生み出す無意識というのは、おそらく、「ウチ」を複雑に結合させる流通システムや、電子メディアで人間の意識が交わりあうそのパターンによって決まってくることでしょう。そういう形で、社会の無意識が媒介項となって、社会のシステムと人間の内面が結合されていく。そういうイメージを、思い描きました。

○橋爪 どういう原理で、そのシステムが更新されていくかと考えてみれば、そこにはやっぱり分業システムがあるのだし、市場システムがあるのだらう。つまり分権的な決定のシステムがある。だから、そこでは、効率の原理は欠かせない。たとえば、今まで一〇の資金を投入して五のことができていたのに、今度は八の資金を投入して五のことができるとしたら、後者のシステムの方がいいに決まっている。だから、更新は起こりますよね。その結果、効率の原理はずっと有効だろうと思

います。

効率だけじゃなくて、機能を向上させるという原理も同時に働きます。ただ、何をもって「機能が向上した」と判断するのかについては、やっぱり人間の意味づけが必要なんですね。僕は、それは、一種の「美学」じゃないかって思ってるんです。

●森岡 テクノロジー美学、電腦美学みたいなものですね。

一様か多様か

●森岡 将来は、機械にサポートされながら生きていく老人・障害者・病人などの数が増えてゆきます。究極的なイメージでいうと、老人・障害者・病人が、マジョリティを形成する社会が、いずれ到来することでしょう。それはおそらく、近代社会が想定していなかったような事態だと思っ

すね。
つまり、近代社会が想定していたのは、健康で良識を備えた成人によって社会が構成されている。そして、そこからはずれる者は社会によって保護される、というものだと思います。けれども、将来の社会では、「通常の」人は身体はどこかに障害を持っていて、機械のサポートなしに生きていくことはできない。特に障害者の場合、生活背景がそれぞれ異なりますから、価値観や世界観が、いっそう多様になっていきます。具体的に言えば、下肢の動かない人と目の見えない人では、取り

巻いている世界は全然違うわけです。だから、身体のどういう場所が欠損していて、どういうところを機械によって補っているかによって、価値観もむちゃくちゃ多様化してくる。

○橋爪 なるほど。それはよくわかりますけどね。しかし、多様性と一様性の問題は、そんなに簡単には片付かないと思います。「多様性／一様性」という議論には、二つの側面があります。一つには、身体の自然的条件というのがあって、それが一様性の基準になっています。そして、老人だったり、障害者だったりすることによって、身体レベルでの多様性をふくらましていく。もう一つは、文化的な側面です。教育とか、風俗・習慣とかがあるエリアに行きわたることによって、そのエリアの中に均一性や一様性が作りあげられていく。反対に、個性とか、異民族とかは、多様性をもたらしていくファクターです。

ところが、機械にサポートされた社会であれば、身体の自然条件における差異というのは、ほとんど問題にならなくなります。外から見てもどうだろうと、おんなじアウトプットをしているわけですから、障害があるかないかということはどうでもよくなってくるわけです。だから、健常者とか障害者とかいう言葉は、おそらく死語になると思います。

文化的条件については、異文化とか異民族の問題がポイントになってきます。今のところ、その国の言語を習得しないかぎり、異文化の人とコミュニケーションすることは困難ですけど、将来は、コンピュータがある程度通訳してくれる可能性があります。つまり、文化的条件についても、敷居

が低くなるということです。その点で、異文化や異民族ということも、あんまり問題にならなくなるだろうと思います。

その結果、コンピュータをどう使いこなすかという、個々の人々の個性という特性が、違いとして残るんじゃないでしょうか。その意味で、人間と機械が共生する社会は、かなり人間的（ヒューマニスティック）な社会になっていくだろうと思います。

標準型は変わるか

●森岡 たとえ障害があっても、それが機械によってきちんとサポートさえされていけば、機能の面では健常者と同じじゃないかってことですよね。それは、確かに正しい指摘です。論理上は、そういうことになるはずですが。

ただ私が強調したいことは、現在の医療テクノロジーの進み方を見ると、障害のサポートを機械によってきっちり行なう準備がまだ整っていないうちに、中途半端な障害者をどんどん製造しているという点なのです。たとえば、医療技術の発達によって、脳内出血の患者さんに手術をして、死なせずにすむことが多くなってきました。ただ、その手術の結果、半身不随の状態が生きてゆかなければならない人も出てくる。いまの状況では、半身不随の人の身体的障害をきっちりとサポートするような機械は、できていません。こういういわば、過渡期の状況では、やはり身体状況の

“多様性”は増大していると考えざるを得ないように思っています。

もう一つは、世界観・コスモロジーの次元の問題です。健常者がマジョリティの社会では、マジョリティの人々による一つの“標準型”というものが設定され、その標準型からはずれていく程度に応じて、多様性が生まれてくるという世界観があると思います。“中心-周縁モデル”の一種ですね。中心に健常なモデルあって、そこからはずれる者が周縁に位置する。そして、このモデルが流通している社会では、標準型からの差異によって上下のヒエラルキーが形成されてゆきます。そして、このコスモロジーをもとにして、ある種の心理的な価値秩序が生まれ、社会に共有されてゆきます。しかし、もし社会が真に多様なものになるならば、このようなモデルはもはや通用しなくなる……。

○橋爪 それは、MS-DOSとか、ウィンドウズとか、そういうOSにあたるものが標準的なイメージを与えることになるわけですよ。

●森岡 そういう問題かな。それは単にフォーマットの標準という話でしょ。そうではなく、いま私が言っているのは、人間とか人格に関する価値観や世界像のことです。

○橋爪 言葉をしやべるといふことのおおもとにあたる精神機能については、機械でサポートするっていうのは当然無理です。さっきも言ったように、本当に自由に言葉を使いこなす言語反応型のコンピュータというのは当然現れてこない。そうだとすれば、人間に対するイメージは、いま議論さ

れているような技術では、根本的に変えることはできないと思います。

●森岡 個人的には、この話題にはこだわりがあるんです。

たとえば、生命倫理のわりと大きな議論の一つに、標準型をどう捉えるかっていうのがあるんです。具体的には、障害胎児の中絶といった問題に関連して出てくるんですけどね。たとえば、かくかくの胎児が標準型であり、したがって標準型以外は廃棄する、あるいは治療の対象とする。あるいは、これは標準型ではないけれど、一応大切にすべきだとかいう感じですね。こういう議論のターゲットがよく見られるんです。生命操作に賛成するにせよ反対するにせよ、どちらの意見も“標準型”というものを念頭において考えている。

○橋爪 わかりますけど。

●森岡 ですから、人間の生命にテクノロジーが深くかかわってくる場合には、“標準型”とそこからの差異の問題は、けっこうポイントになるはずだと思っているわけです。

○橋爪 その問題は、おそらくこれからの議論の中で、もうちょっと別な形で出てくるんじゃないですか。

電脳身体論

●森岡 ここで、身体の問題を一つの切り口として考えてみたいと思います。

人間と機械が共生する社会では、身体の問題は、いろんな意味でクローズアップされるだろうと思います。たとえば、痛んだ臓器を人工臓器に置換していくということが、これからの医学の主流になっていくと言われています。人工身体化が今後確実に進んでいき、機械だらけになった人工身体をいかに維持してゆかかということが、将来の医学や保健の主要な課題になっていきます。

具体的には、たとえば埋め込み型人工心臓というのがあります。人工心臓を身体の中に埋め込むということは、それが身体の一部になっていくことを意味しますよね。そして、これによって二十年以上生きる人が出てくると、人工心臓は、もう身体の一部として考えていかざるをえないし、本人自身の身体イメージの中に組み込まれていきます。メルロ・ポンティの言う意味での身体図式の一部になってゆくわけです。

次のステップとして何が起きてくるかというと、埋め込まれた人工臓器と、外部にある機械やコンピュータが接続されます。単に、エネルギーや化学物質の補給というレベルにとどまらず、外部にある大きなコンピュータからの制御を受けながら体の中のマイクロチップが動いていくとか、体内に埋め込まれた人工臓器が、それ自体センサーとなって、外部にデータを送るといった形もありうるでしょう。

そしてさらに、視覚とか聴覚などの感覚器官が人工臓器に置き換えられた場合、それは必然的に電子メディアと結合してゆきます。具体的には、盲人の視覚野に直接電極をプラグ・インして、刺

激を与えるかどうかという実験がすでに始まっています。もしそれが成功すれば、その電極にテレビを直結したり、あるいはパソコン通信に直結することだってできる。SFのサイバーパンクみたいな形で、感覚器官そのものが外部のメディアと直接に結びつくということも、確実に起きてくると思います。さきほどの「ウチ」の例でいえば、「ウチ」の壁そのものが、感覚器官の直接的なインターフェイスになっていくと思うんです。

ということは、ロボット住宅に結合されて生きていく人間は、「ウチ」の壁を通り越して、自分の身体イメージが拡大されていくことになるでしょう。身体の外延が社会全体にまで事実上拡大され、身体イメージもまた拡張される。とすれば、「ウチ」の外部で私の身体が他者の身体と交流していくというような状況も出てくるかもしれません。

ある個人が、埋め込み型の人工臓器を内蔵していたとしますよね。それは外部のコンピュータと連携していて、何百人かの人間たちとつながっているわけですよ。つまり、社会の中で、自分の身体が他の身体と結ばれていて、彼らとある意味で運命を共にしている。そういう身体像を持つようになるのではないかと。

あるいは、人工的な感覚器官がメディアに接続された場合、同じようなことが起きると思うんです。たとえば、五感を直接コンピュータ通信にプラグ・インして、電子の架空世界に自分が行けるようになった場合、その架空世界での体験というのは、そこに来ている他の人々と共有されるわけ

です。

そうなった場合、それはわれわれのもつ身体イメージに大きな影響を及ぼし、身体像そのものが大きな変貌を遂げていくんじゃないかと……。

近代的な発想で言えば、個々人の身体というのは外部世界からはとりあえず切り離された肉体であって、個人がその肉体を所有しているというものです。このような見方のリアリティが、今後だんだん希薄になっていって、公共的な身体領域のイメージの方が増大してくるのではないかと。

身体像は変わらない

○橋爪 今話して下さったことは、非常によくわかります。だけど、私のイメージと微妙に違うような部分もあります。まず結論から言いますと、私は、身体をめぐる状況の根本的な構造は変わらないと思っています。

まず、人間が人間についてのイメージを根本的に変えなければならぬのはどういう状況かというと、さっき言った人間と同等のレベルの言語反応型コンピュータが誕生したときだと思うんですね。もしそうなったとしたら、人間は、その機械を人間と認めるより以外に方法はないわけです。

しかしその機械は、人間が生まれてくる生命プロセスとは全く関係ない。そこで、人間と機械の境界が、ベルリンの壁みたいに劇的に崩れだして、新しい秩序が始まる。ただそれは、技術的に非常

に難しいので、起こるとしてもちょっといつになるかわかんない。うんと先なので、とりあえず今は、そのような状況は考えないことにします。

そうすると機械というのは、エラーが見えるような形で、人間の言葉に反応するだけの存在なので、やっぱり機械は機械であり、物の一種にすぎない。ただかか身体をサポートするという位置に甘んじるだろうと思うんですね。つまり結局、人間が主体で、機械が対象であるという関係は崩れないんです。そうすると、機械が人間を助ける究極の可能性というのは、身体を全部機械で置き換えてしまうことです。これはほぼ百パーセントのサイボーグ化ということですね。この場合、機械は言語を自由に操れないから、やっぱり脳を代替することはできない。しかし脳以外の器官は、原理的に代替可能です。そういう方向に向かって、一步一步着実に近づいていくのではないのでしょうか。

そのとき、生理学的・生物学的な立場からいろいろなことが言えるでしょうけど、私は、現象学が一番面白いと思っています。身体というのは、要するに、人間が随意にコントロールできる世界の一部、ということですよ。もし自分の体が全然随意に動かなかったとしたら、それを身体と感じられませんか？ 感じられませんか。感覚神経系と運動神経系の二つがありますが、これが連合することによって、身体図式ができあがっているわけです。この「身体」と「世界」の区分は脳の中に投影されて、再生産されて、自分の身体に関する像を頭の中に思い浮かべて、それを自分

の「身体」とであると把握しているわけです。そしてわれわれは、身体像とならなかった残余の対象世界を、「世界」としてイメージしているわけです。

この関係は、たとえ「身体」が機械によって置き換えられたとしても、基本的に変わりません。たとえば、心臓というのは、随意には動かない。感覚的には、ドキドキしているかなくなって感じる程度です。だから、これが、人工心臓に置き換えられたとしても、人間と身体の関係は何の変化もたらされない。知識として、「自分は人工心臓持っているな」って思うぐらいのことです。

それから、手や脚について考えてみます。手や脚みたいなどころですと、感覚細胞がたくさんあって、随意に動いています。これは、随意に動いて問題がなければ、自分の手とおなじだと思うんです。動いた結果、感覚っていうのがあるんですけど、感覚が、ちゃんとフィードバックされていれば、やっぱり自分の手とおなじことです。これは人工の手だと視覚的にフィードバックされても、運動系と感覚系が保存されていれば、やっぱり自分の手ということですね。ナチュラルな手と人工の手を区別する理由は、全く見あたりません。もし、感覚系がなくて運動系だけの手としたら、今度は不完全な手だということになるわけです。それは、感覚が麻痺したときの手とおなじことです。つまり、欠損している。

近代という未開宗教

●森岡 現象学的には、確かにその通りだと思います。ステレンスで置き換えられた義手でも、機能が同じなら手として受けとめられるというお話は、現象学的なレベルではまさにその通りだと思います。

しかし、微妙でわりと厄介な問題が生じてくると思います。たとえば、いまの臓器移植の場面でわれわれが直面しているのは、腎臓を提供されたのだが、それが他人の臓器だということがレシビエントの脳裏を去らず、精神的にまいってしまふことがある。いまのお話ですと、誰の腎臓をもらっても、機能が同じであれば何の問題も起きないということになりますけど、実際にはいま言ったような問題が起きているわけです。死んだ人のものをもらっているというある種の罪悪感とか、自分の身体の中に他人の臓器があるという知識が原因で心身症になっていくとか、そういうことがあるのです。

○橋爪 文化的なレベルの話だと、レヴィブルユールの「融即」とか、フレーザーの言う「民間呪術」という話であって、レベルが違うと思うな。

●森岡 レベルが違うかもしれませんが、現実問題として、そういうことが起こっているというのは、まぎれもない事実です。

○橋爪 おっしゃることは完全に正しいけど、それは、われわれが未開宗教の中にどっぷりつかって

いるからです。そのことによって、心身反応が引き起こされているという話にすぎないんです。

●森岡 でも、その未開宗教というのは、近代そのものが内包しているところの宗教かもしれませんよ。

○橋爪 人工臓器が浸透してゆけば、いずれそういうこともなくなりますよ。

●森岡 そうでしょうか。

○橋爪 過渡的な問題じゃないかな。サイボーグ化がまだ十分でないから、臓器移植が問題になるんではありませんか。

●森岡 そうでしょうか。

○橋爪 サイボーグ化が進むということは、他者の臓器を貰わなくてもすむということでしょう。だから、他人の臓器が自分の体内にあるという違和感は、まず端的になくなるはずですよ。

●森岡 でも、臓器や腕をステレンスに置き換えるということが、今度は、別の違和感の原因になっていくかもしれない。

○橋爪 もし銀色でまぶければ肌色にしようとか、コチコチだったらブヨブヨにしようとかいろいろ考えて、ナチュラルな手に近づけていこうと思うと思います。

●森岡 でもですね、腕がメタリック系の機械によって置き換えられるようになったとしても、そのメタリック的なものが、将来の社会の中で持っている文化的意味付けがあるわけで、それが原因と

なって新たな文化的な問題が引き起こされてくるんじゃないかということです。それに、限りなく生身にちかい肌色の機械が作れるようになったとしたら、今度はそういう状況そのものに對してノイローゼになるような人たちが出てくるでしょうね。

○橋爪 もし話を譲ってその通りだとしても、おそらくそこに、二種類の人間が現れるだけのことです。つまり、一つは、「人工臓器で困った」って嘆いたり、「オマエは、人工臓器野郎だ！」って、いじめたり差別したりする人間。

もう一つは、「俺は、サイボーグなんだぞー」って言って、威張りだす人間。

人工臓器に対する、マイナスとプラスの両方の価値が出てくるはずですよ。そしてその場合、どちらが将来性があり、生き残るかという、プラス価値をもっている人たちの方だと思います。

●森岡 うーん。

フリーエの夢、^{アルシブラ}完全肢

○橋爪 人間は、今みたいな姿かたちをしているけど、はたしてそれが完全なものかと考えてみると、いろいろ問題ありますよね。身体比率からしたって不完全だし、遺伝子だって不完全です。

私の好きな話に「フリーエの夢」というのがあります。これは、空想社会主義者のフリーエの書いていることなんですが、彼は、あと百年もすると、人間には手がもう一本生えると言っているんで

す。もっと自由な三本目の手が背中から出てくるそうです。フリーエはいかにも空想家らしく、なんの根拠もなしに勝手に生えてくると考え、それを「進化」と呼んでいました。そして彼は、これを「アルシブラ」(完全肢)と名づけています。アルシブラは、高い塔に登ってペンキを塗ったりするときに非常に便利だそうで、フリーエは、その利便性についていろいろ書きなべています。

しかし、別にこのような「進化」を想定しなくても、将来は、それと同じように背中に埋め込むタイプの機械が発明されたって別にかまわない。まあ、たいていのことは機械にやらせればいいんですけど、どうしても人間がやりたいことがあれば、人間と機械をつなげてしまえばいい。たとえば、手にソケットの電極をガシャツとはめて、その先にクレーンみたいなものと接続しておく。そして、ソケットの中の手を動かした通りにクレーンが動くようにします。もし機械に感覚の機能をもたせて、手を動かしたときに手がたえが感じられるようになったら、これはまさしく手の延長ということになりますよね。

森岡さんの説だと、もし手とクレーンが接続された状態がずっと続けば、身体像が拡張されたということになります。しかし私は、さっきも言ったように、身体像の基本的な条件というのは、その簡単には変わらないと思う。どうしてかという、身体とは、随意に、すなわち自分でコントロールできることだからです。

●森岡 おっしゃることはよくわかります。ただ、細かい点で、少し議論しておく必要があるかと思

います。いま橋爪さんは、身体像を、随意という点から説明されました。しかし、もうちょっと正確に言えば、身体像というのは、随意と不随意との境界に現れてくるものですね。

○橋爪 そうです。

●森岡 たとえば、私がいま神様になって、この世界のすべてを自由に動かせるようになったとします。全宇宙は私の意のままとなり、すなわち随意になるわけです。しかし、そのとき全宇宙が私の身体になったかという、実はそうではありません。その場合、「身体」という概念そのものが意味を失うのです。というのも、「身体」という概念は、自由に動かせるものと動かせないものとの境界線によって切り取られてくるものだからです。もし、不随意がなくなってしまえば、身体という概念もなくなるんだと思います。

○橋爪 つまり、非作為ということがあると、身体との境界というものが意味を持つわけですね。だけれどその構造というのは、身体を機械に置き換えることによって変わらないうのが私の仮説なんです。

●森岡 それが、いまの論点でしたね。

○橋爪 さっきのパワーシャベルの例で言えば、どんなにバカでっかい機械を持てても、それを自分の身体と接続することは、技術的には可能ですね。あと、テレコミュニケーションみたいな例で言えば、ここに電極があつてソケットと接続する。手の先というのは、地球の裏側なんかに

あるとしますね。そこでモニターかなんか見ながら、地球の裏側で自分の身体を動かすこともできる。そういう「テレ身体」みたいなものも可能ですね。

共有か麻痺か

●森岡 それは、現に研究されていますね。原子炉ですでにそれやっています。NASAは、火星探査をその「テレ身体」でやろうと研究しています。

でも、まさにそこなんです。私は最初に、「身体の共有」ということをちょっと言いました。機械が介在しても、身体の基本的な機能は変わりません。しかし、その先の問題として、身体の外への拡張が進んでいった場合、外在化された身体が他の人々の身体と社会的に重なってくるんじゃないかということなんです。

○橋爪 身体というのは、もともと交換不可能なものなんです。本体から切りとっちゃえば、死んじゃいますから。だから義手とかパワーシャベルとかのように、交換された途端、一般の物体とおなじような性質を帯びてくるわけです。価格があったり、製造プロセスがあったりというぐあいに。そういうわけだから、社会的なコントロールを被ることをまぬがれない。

しかし、体の中にはめ込まれた場合、現象学的に見て本人の身体だし、他人がとやかく言うことはできません。こういう論理があるだろうと思うんです。

●森岡 私が言いたかったのは、そういう問題じゃないのですよ。

たとえば、架空のクレーンを考えてみましょう。広場の真ん中に大きなクレーンがある。そのクレーンのコントローラーは、この部屋の机の上にあるとします。で、そのコントローラーは、ちょうど手袋みたいになっていて、そこに指を突っ込んで、その指を動かせば、それと同じようにクレーンも動く。この場合、クレーンはまさに手の延長として自由に動くわけですね。

ところで、このクレーンに、十個の手袋型のコントローラーを接続してみます。そして十人の人間が、同時に十個のコントローラーに手を突っ込んで、一台のクレーンを操縦できるとする。そのとき、クレーンはどういうふうに動くかというと、十個のコントローラーからの信号の、「平均値」にしたがって動くようになっていく。

で、十人の人間が一台のクレーンを動かしている様子を想像してみましょう。クレーンの動きには、自分の意志だけではなく、残りの九人の人間の意志も反映されているわけです。ですから、自分が思ったとおりには決して動かない。しかし、クレーンの動きに自分の意志がまったく反映されていないわけでは決していない。

○橋爪 それは「共有」ではなくて、「麻痺」だと理解できる。そしてそれは、自然身体でもよく起こりうることです。たとえば障害を受けた人が、以前のように何かをやろうとします。しかし、思うように手が動かない。このとき彼の意志は、割り引かれた形でアウトプットされているわけです。

このような状況は、明らかに「麻痺」です。

●森岡 動かないという点を強調すれば「麻痺」になるでしょうが、動いたという点を強調すれば、やはりおなじような意志をもった人たちがクレーンという身体を「共有」しているということになりはしないでしょうか？

太陽を共有しているか？

○橋爪 だから、「共有」と「身体」との間に、概念上の矛盾があるんです。もし身体だと考えれば、随意か不随意かっていう話になります。だから、十分コントロールできないとしたら、多分、それは「麻痺」なんです。他の人がクレーンを動かそうとしていることを、直接知る方法がないとすれば、二人か三人で動かしているからこうなったという状況を理解する方法があっても、それを当面知りえないとすれば、それは明らかに麻痺なんです。

●森岡 そうですか？ 「麻痺した身体」を、十人の人間たちが共有したってことになるような気がするのですが。今のアナロジーをもう一歩進めてみます。

たとえば、クレーンの腕が上にあがったとしますね。そのとき、十人のうちのたとえば三人はちょうどクレーンを上にあげようとしていたとする。だとすれば、その三人にとっては、クレーンは自分の意志通り動いたという感覚があるわけだから、その瞬間その三人の身体は、同時にクレーンに

まで拡張され、そこで重なりあっていたことになるのではないだろうか。

○橋爪 面白い思考実験だと思うけども、どういうことかな？

●森岡 そのときに、身体の共有が実現されているんじゃないかということですか。

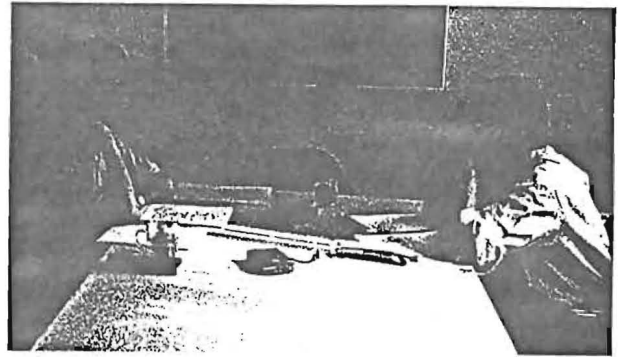
○橋爪 身体の共有じゃないよ。

●森岡 どうしてですか？

○橋爪 身体が共有されているということを、どうやって実証しているわけですか。さっきのロボット住宅の例だと、人工臓器の電源をみんなで使っているということでしたね。しかし、電源まで自分の感覚系が及んでいないんだったら、それは共有でもなんでもない。事実として、そう認識したというだけの話であって。

●森岡 そうかなあ。

○橋爪 そんなこと言えば、われわれはみんな太陽がなければ生きていけない。つまり、熱源を共有しているわけです。



●森岡 そうです。

○橋爪 でも、それは、身体を共有しているという話とは全く関係ない。

●森岡 私は関係あると思います。

○橋爪 そんなこと言えば遺伝子とか、細胞の内容物は、みんなが共有しているわけですよ。それは生物の永遠・不変の宿命だけれども、身体が相互に分離していることと生物学の常識は、なんら矛盾しません。だから、細胞を共有しているとか、熱源である太陽を共有しているとかと、人工臓器の電源を共有しているとか、そういうことと身体の共有とは、全く違うことだと思う。

●森岡 その指摘は正しいと思います。

○橋爪 でもね、身体が共有されるかもしれないという予測は、とても重要だと思うんですよ。

●森岡 はい。

○橋爪 もしそのさきの展開があれば、ぜひおっしゃって下さい。仮に手袋型のクリーンの腕とかがあって、そこで身体が共有されたなら、新しい身体像が生まれちゃったとして、そこからすごいことが始まるのであれば……。

●森岡 うーん。そう言われると……。しかしこれって、すごく大事なことでないかなって感じがするんですよ。うーん。

身体を自由にデザインする

○橋爪 さっき、人間の感覚や身体を、機械システムで置き換えていった場合に、従来の身体の観念が崩れるのではないかという話で、私は「崩れない」って答えました。ただ、誤解しないでほしいのは、これは、身体の観念というのはかなり堅牢だという意味で言ったのです。具体的な現れとしての身体の形はいろんなものがあってもかまわないと思っています。

だから、初期の自動車が馬車とそっくりだったように、当分の間は、手が二本で、脚が二本で、指が二〇本といった古典的な形を保存しつつ、人間の身体は機械で置き換えられていくことでしょ。う。だけど、機械の合理性が生理的な身体を持っている合理性をやがて上回るでしょうから、そのうち、人間の自由を表現できればどんなデザインになったってかまわない、ということになるはず。そうすると、人間の身体というのは、全く自由にデザインできる、ということになります。

●森岡 その場合の自由というのは、社会の価値観に制約されるんじゃないですか？

○橋爪 ですから、制約と自由とのせめぎあいの中で、いろんなアイデアが出てくるわけです。飛行機だって、始まりのときには鳥のような形に作っただけで、自動車でいうのは馬車に近かった。飛行機とか自動車の、機械としての機能が認識されると、その機能にふさわしく設計できるようになり、それにそった形でデザインも洗練されてゆきます。それとおなじことですね。

●森岡 なるほど。

○橋爪 脳の性能っていうのは、まだよくわかっていませんが、身体と密接不可分だということは明らかです。脳の中で考えたことは、手、指、脚、筋肉などの運動器官を通じてアウトプットされます。また、目、耳などの感覚器官を通して、外界の情報がインプットされていきます。そして、このような運動器官や感覚器官の一部のうちいくつかが欠損しても、脳が柔軟にそれに対応することができるよう、身体のイメージというのは、かなり安定的なんです。

●森岡 そうですね。

○橋爪 だから、五感以外に新しい感覚器官を作って、そのセンサーを導入した場合にどうなるのか、多言語状況でも通訳できるものすごく性能のいい機械ができたとして、それと脳を接続した場合に、言語野がどうなるかなどは、今のところ全くわかんないですね。身体を拡大していった場合に、脳内がどのように再構成されていくかっていうことも全くわからない。身体概念がくずれするようなことはないにせよ、かなりドラスティックな変化が起きるだろうということは予測できます。

差し歯は身体で入れ歯は付属物

●森岡 いま、なんとなくわかりかけてきたのですが、橋爪さんは、「随意さ」というものが「身体概念を決める第一の本質である」と考えられています。ところが、私は、「随意さ」の他にも、

同じくらい重要なファクターがあるのではないかと感じているんです。ただ、それが何であるのかを、私がいま明確に言葉にできないので、こういう混乱を巻き起こしているんでしょう。ごめんなさい。

で、いま橋爪さんが言われたように、身体は感覚神経と運動神経を通して、脳を束縛しているとも言えるわけですね。

○橋爪 脳と連続した系なんですね。

●森岡 ですから、その二つの神経系が外部にまで伸びてきたときに……。

○橋爪 というか、初めっから、外部まで伸びているんですよ。

●森岡 感覚神経系については、その通りです。ただ、運動神経系については、現時点ではそんなに外部には伸びていない……。

○橋爪 たとえば、自動車にずっと乗っていたとするとしよう。その場合、タイヤの振動とかカーブを切るときの性能とかを、自分の身体の一部として受けとめるから、車のボディも自分の身体の一部になるわけですね。ただ、自動車の場合、すぐ降りちゃうからね。車から降りた途端、再び身体はボディから切り離される。

だから、車のボディを身体と考えるのは不合理なわけです。やっぱり、皮膚が身体と外部を区別していると考えた方がいい。もし、取りはずしのきく義手で、今日はたまたま付けているとしたら、

やっぱり付属物であるって考えるだろうというのが、私の意見なんです。

●森岡 じゃ、差し歯は身体で、入れ歯は付属物であるということですか？

○橋爪 そうです。

●森岡 でも、もうすこし極端な例を考えるとどうですか？ もし仮に、自動車の中で生まれ、育ち、

その中から一步も外に出ることなく死んでいく人がいたとします。しかもそれは乗合自動車で、何人かがずっと一緒に乗って生活を共にするとします。彼らは、その成長の過程で、同じ自動車の揺れや振動や雰囲気などを内面化し、身体化しながら成長するわけです。彼らの認知機構や、思考回路にまで、同じ自動車環境が深い影響を与えている。こんな場合、彼らは、この乗合自動車を外部の身体として共有しているとは言えないでしょうか？

○橋爪 言えないと思います。運転している場合、自分がこう意図するとタイヤがこう動くという連動があるからこそ、随感を得られるんです。全く非作動的に動いているなら、それはタイヤの振動ではなくお尻の振動です。だから、自動車の輪郭をもって自分の身体と考える積極的理由はなにもないわけです。

●森岡 じゃあ、もし彼らのお尻から根がはえていて、それが自動車の座席と一体化し、自動車から栄養分を補給するようになっていたとしたら、どうですか。タイヤのきしみなんかも、手に取るようにわかる。この場合でも、共有していない？

○橋爪 自動車が走っているというのは、客観的に認知されるけど、自分の体というふうには考えられない。つまり、身体を投入しているっていうことがなかなか感じられないはず。あなたの言う自動車は、要するにこの地球と違わないんです。

身体を拡張をめぐって

●森岡 じゃあ、しつこいようですが、さきほどのクレーンの例をもう一度考えてみます。もし、非常にものの考え方が似た何人かが、同じ一つの外部の機械の腕を共有していたりしたら、それはけっこう自分の意志にしたがって動くわけだし、そうやって使っているうちに、それが自分の脳そのものにある経験づけをほどこして、脳を束縛してゆくことがありえると思うんです。

だとすると、その外部の機械の腕は、各人の脳と直結した身体として各人の身体像を形成するわけです。つまりこの例では、乗合自動車の場合のように感覚神経系のみが共有されているのではなく、感覚神経系に加えて運動神経系もまた共有されている（かもしれない）わけです。だとしたら、そのときに、その外部の機械の腕は、何人かによって共有された身体だとは考えられませんか？ これは、われわれが太陽を熱源として共有しているという話の次元と、全然違ったものだと思うのですが。

○橋爪 シャム双生児（二重体児）の例を考えてみましょう。生存可能な二重体児は、頭部も脊髄も

完全に別々で、体がつながっているわけです。この状態は、二人三脚のときに二人の人間が一つにくくりつけられているのと同じだと思います。身体は物理的につながっているが、確かに自分の体である部分と、自分の体でない部分、それにおそらく、自分の体であっても自由に動かせない部分の三つがあることになるだろう。

●森岡 あと、いま気づいたのですが、われわれの身体像は、必ずしも「随意」にできるものだけから構成されているわけではないですね。たとえば、自分の意志に反して出てくる「吐き気」とか、突然湧き起こってくる「よるこび」なんかは、非「随意」なものです。かと言って自分の身体の外にあるものでもない。だから、それらは身体像の一部を構成するものとして、考えてゆくべきだと思います。だとすれば、そういう吐き気やよるこびを直接引き起こすようなもの、たとえば内臓のようなものが、外在化されて、そして数人によって共有されたとすれば、それはやっぱり身体像の共有だと言えるような気がするのですが……。

○橋爪 内臓には感覚神経がなく、明瞭に意識できませんから、大脳には内臓についての身体像をつくることができて、漠然と「だるい」とか「すっきりした」とか感じるしかないわけです。腎臓透析などは、みなで順番に使っていますが、仮に二人が同時に使って「すっきりした」と感じたとしても、それは、梅雨が開けるとみな同時に「すっきりした」と思うのとあまり違いがない。

●森岡 これは、私のこだわりすぎかもしれませんが、このこだわりが、こういった成果に結びつくの

か、いまの私はまだ明瞭に言語化することができません。宿題にさせておいてください。

自殺する自由はあるか？

●森岡 人間が自由の範囲をどんどん拡大していくのが進歩だという考え方は、ずっと以前からあったと思います。そして、他人に明確な形で迷惑をかけないかぎり、人は自分がしたいことをする自由がある、という発想も昔からあったと思うんです。これは、現代の先進国では、広く認められている考え方です。ただ、一九八〇年代の臓器移植の議論は、このような考え方に、はっきりと疑問を投げかけたのだと思います。

臓器移植の議論の中で、こういうものがありました。すなわち、臓器をあげたいという人がいて、その臓器を貰いたい人がいて、その二人の間に合意が成り立ってれば、外部の人がそれにとにかく言う筋合いはない、という議論です。具体的には、加藤一郎さんや太田和夫さんたちが、かなり強力に推し進めた論理ですね。これはある意味では、非常に明解なんだけど、同時にいくつか疑問点も出てきたわけです。私は次の二つの疑問を感じました。一つは、どうしてこの議論はこんなに明快なんだろう、ということ。そしてもう一つは、どうしてこんなに明快にもかかわらず、それはある種の抵抗感をわれわれにもたらすのだろうかということ。彼らの論理をどんどん拡張していくと、一つの帰結を必然的に生むことになります。それは、自

殺の肯定ということです。つまり、もし私が自殺をすることによって、悲しむ人がいなかったとすれば、自殺を制止する積極的な理由は何もないというわけです。しかしこれは、おそらく現在の社会では、受け入れられない考え方だと思います。逆に言えば、現代社会はなぜ、自殺を肯定しないかということです。つまり、加藤さんのような論理で臓器移植が肯定されるのだったら、自殺や自殺補助もまた肯定されそうに見える。しかし現代社会は、臓器移植は肯定しても、自殺は肯定しきかない。

この問題を考えるときの視点の一つに、他人に迷惑をかけないかぎり自由だといっても、その「迷惑」とは何かが具体的に何となくきりきりしいということがあります。たとえば、人が自殺をしたとき、嫌な思いをする人は結構いるわけです。だから、自殺もやっぱり人に嫌な思いをさせるからいけない、という理屈も一応成立するわけです。だとすると、臓器移植を行なうことでいやな思いをする人もたくさんいるわけだから、臓器移植もダメだということになるのか。

もう少し実話的な話をすると、当事者たちが合意していれば臓器移植が許されるのならば、それと同じ理屈で、当事者がすべて合意している「代理母」も許されなければならないはず。ところが、日本では代理母は許されていないし、世界的に見ても突出して許しているのはアメリカぐらいです。これを、どう考えればよいのか。

○橋爪 なるほど。

●森岡 自殺の自由を話に戻すと、「自殺する自由」といった意味での自由は、人間が触れるべきではない神聖な領域に踏み込んでいないかという意見があります。ところが、現代、われわれはすでにこのような神聖な領域が存在することを実感しえなくなってしまっている。ところで、「自由」というものは、「不自由」な領域がはっきりと存在するから、逆に大事なすばらしいものとして実感できるわけです。ところが、テクノロジーが人間の自由の範囲をどんどん拡張してゆく結果、「不自由」の範囲が縮小しはじめていて、そのおかげでわれわれ先進国の人間は「自由」の価値を実感できなくなっているんじゃないでしょうか。言い換えれば、自由を味わうことから疎外されているんじゃないか。

人類史の大部分を見ると、自分の意志の届かない領域の存在を自覚することによって、逆にいま獲得している自由を実感してきた歴史があります。そしてわれわれは、それに対応して世界観や価値観を作りあげ、行動を決めてきました。ところが、自由の範囲が拡大するにもなって、手の届かないものの存在を以前ほどははっきりと実感できなくなってしまった。いまでは、テクノロジーが進めばいずれは何でも解決するという発想がかなり社会に広まっています。しかしそのような考え方が、逆に人間の抑圧の原因となっているんじゃないか。こういう問題が、実はさきほどの加藤一郎さんたちの議論の裏には潜んでいるのではないかと気がするのです。人間の自由の拡大をサポートする形で発達してきた現代の科学技術をどう評価するかという問題もからんできますね。

ちょっと、広げすぎたかな。

桎梏としての身体

○橋爪 まず加藤一郎さんの自由主義の原則みたいのがあって、それにもかかわらず、多くの人々が何かおかしいと感じてるといふことですね。これは、法律の問題で、私は必ずしも明るくないんですが、少しだけ意見を言わせてもらいます。

私の理解だと、市民社会には、契約の自由という原則があります。自由な市民Aと自由な市民Bがいて、双方の合意によって、ある契約を交わすということは自由であり、その契約が成立した瞬間から、双方を拘束し、契約の実現は、法のもとに保護されます。つまり、契約に違反した場合は、司法的な手続きによって制裁を受けることがありうる、ということです。だけど、じゃ、全く自由になんでも契約してよいかというと、決してそうではありません。社会的通念とか、道徳律みたいなものがあるって、あくまでその許容範囲の中だけで、契約は自由だということです。たとえば、Aは何でもBの言いなりになるというような、基本的な人権を踏みにじるような内容を含む契約を結んだとしても、その契約は無効であり、国家によって保護されないというわけです。なぜなら、社会の人間に対するアイデア、つまり人間はこれこれであるべきだという観念に抵触するからです。

じゃ、人間とはこういうものだという観念を誰が決めたのかというと、それは契約によって決め

られたのではなくて、最初から決まっているわけです。つまりそれは、自然法によって決まっているわけです。自然法というのは、発見すべき法なのであって、ある特定の社会だけに固有なものではありません。すべての社会に共通する、つまり、人間であるかぎり、必ず満たしていなければならない条件です。契約の自由はもと、こういう二元的な問題だと思うんですね。

で、加藤さんたちの議論が人々におかしく感じられたというのは、臓器移植の問題も含め、従来の人間の観念というのが、そろそろ揺らぎはじめたせいじゃないかっていう気がするんです。そして、加藤一郎さんのような考え方を認めて、人間の観念を少しだけずらすことによって解決をはかるのか、それとも、人間の観念はそのまま変えないで、契約の自由の原則を制限する方向でことを進めるのか、そういう微妙な問題を含んでいると思うんです。

●森岡 非常に明解な整理をしていただきました。確かにその通りだと思います。

○橋爪 それで、契約自由の原則についてというのは、人間は、本来自由であるということでしょう。しかし、自由を正確に語ることは非常に難しいわけです。つまり、人間の自由は何かと定義することは、自由に対して規定を加えることになるからです。つまり、自由に定義を与えることによって、それ以外の自由の可能性を全部否定するわけですよ。よくよく考えてみると、本来自由とは、定義や規定を逃れるものなわけです。ですから、自由を定義するということは、非常に矛盾した行為なわけです。だから、これを積極的に語ることは非常に難しい。難しいけれども、みんなが自由と言っ

てるから、なんとなく納得してしまっているだけなんです。

しかし、自由があるということは、その反対の、自由に対してある条件や制約を加えているということでもあるわけです。つまり、人間というのは、自由である以上、必ずその反面の拘束を受け入れているものなんです。その代表的なものが、自分の生命、つまり「身体」だと思うんですね。身体を持って生まれてきたからこそ、生きたくなくても生きていかなければならない。また、もっと生きたいと思っても、死んでしまう。これは、自由の反対であり、大いなる拘束だと思うんですね。そして生命の摂理みたいなものが、おそらく自然法と一体となって、人間に対するあるイメージを与えているんだと思うんです。

禁断の自由

○橋爪 ところが、テクノロジーが入ってくると、この生命を随意に延長できることになってきます。もし生命を随意に延長できるようになるとすれば、人間は、永久に死ななくなるわけです。そうなると今度は、自由の名において、生命を随意に停止してもかまわないということ認めないと、釣り合いが取れなくなってきました。つまり、「随意に生命を延長する自由」と「随意に生命を停止する自由」とのバランスです。生命が本人の意思と関係なく終っちゃうというのが自然法だとすれば、これまでは、ちょうどそのバランスがとれていたわけです。だけど、生命がもし自由の範囲内にあ

るとすれば、自然法は変化して、生命を随意に停止する権利をも、自由の中に含めなければならなくなる。だから、抵抗があるのは当然なんです。

●森岡 なるほど。だとすれば、生命操作の自由が拡大されてゆくのに比例して、生命を終結させる自由もまた拡大されてゆくことになるわけですね。

○橋爪 それが集中的に現れているのが、末期ガン患者の延命治療です。全く希望のない末期患者が、苦痛のみを味わいながら、三週間、五週間生き延びていく。寿命をどんどん引き伸ばしていくことは技術的には可能でしょうが、患者にとってはほとんど意味がないから、医療行為に値しないという選択もあるわけです。その結果、医療行為を放棄するっていう形も当然現れてきます。

●森岡 そうですね。こういった、尊厳死、安楽死の場面では、医師や家族が、いつどのようなタイミングで、どんな形で医療行為を放棄すればいいかが、いつも問題になってきますね。

○橋爪 経験のある医師ほど、その辺のタイミングというのをよく心得てるんじゃないですかね。たとえば山崎章郎さんが『病院で死ぬということ』（主婦の友社）という本を書いています。あの本の中では、最初は延命治療一点張りだった著者が、だんだんそれに疑問を感じだしてくるんですね。そして、結局は、延命はしないっていうお医者さんに変わっていくプロセスが見事に描かれています。しかしこれは、十分考えてみれば、妥当な結論だと思うんです。

テクノロジーとモラル

●森岡 世界的に見れば、消極的な安楽死と、積極的に殺しちゃうことの間には、明確な線が引かれています。

○橋爪 もちろん、そうです。

●森岡 そこで、積極的な安楽死に対しては、法的に何らかのけじめを付けようというのが、大方の見方だと思います。

○橋爪 もちろんです。で、少なくとも、大方の合意が得られるのは、当然消極的な、延命措置を停止するってことです。で、そこまでだったら、合意できるだろうということです。これを非常に時間的に伸ばしたものだと思うんです。進歩した延命治療技術によって、本人は、生きていたくもないのに、どんどん生きていく可能性はあるにはある。しかし本人の意思によって、そういうふうに生命を延長するのはやめましょう。その場合、いわゆる自然死が訪れるんだろうけど、消極的な自殺とも言えますね。

●森岡 先日オランダで、積極的な安楽死を認める安楽死法が成立してしまいました。ですから、今後は、積極的な安楽死をも視野に入れた形での合意が模索されはじめるでしょうね。いま橋爪さんは「自然死」という言葉を使いましたが、人間が機械によってサポートされている場合、自然死という概念が意味を持たなくなります。

